



樹間から望む富士山

百年から三百年といわれる杉が二百本ほど林立しており、その中を歩くこと十五分ほどで追分の感井坊に着く。右に向かえば奥の院思親閣、左は七面山へ向かう道である。昔のように歩く信者が少なくなったのだらう、主を失った感井坊はその役目を終えて今にも朽ち果ててしまっている。

十萬部寺からはなだらかな下り坂で、一時間ほどで赤沢の宿に入っていくことになるが、途中、前方に突然七面山が見えてくる場所に出くわす。そこは遙拝所といわれる場所であり、その昔、徳川家康の側室、お万の方によって七面山の女人禁制が解かれるまでは、女性たちはこの場所で七面山を拝み、引き返していったと言われているところである。



赤沢宿の旅籠

ここまで歩いてきた車道と分かれ、路肩に若山牧水の歌碑が置かれている石畳の坂道を赤沢宿へと入っていく。

# 山梨の旧道を訪ねて

## 一道一会

身延山追分道 / 赤沢宿

身延山から追分感井坊を経て七面山へ向かう参道、その参道の講中宿としてにぎわった赤沢宿は今もお静寂の中で息づいている。

身延山久遠寺の三門から早川町赤沢宿を経て七面山敬慎院に通ずる山道。身延山追分道、身延往還、あるいはみのぶ道とも呼ばれる全長約二十二キロメートルの山道は、古くから修行と祈りの参道であった。今回は、久遠寺二門を過ぎ洗心洞といふトンネルをくぐりぬけた先にある妙石坊を起点に、追分感井坊を経由し早川町の赤沢宿までの道を歩いてみた。



千本杉

も見える。しばらく歩くと杉の大木の間へと道は入っていく。この辺りは千本杉と呼ばれているが、樹齢二



妙石坊の高座石

く。宿の中心へ向けて下って行くこの道は、良く整備されていて歩きやすく、両側にある昔の旅籠の家並みとよく調和している。歩けば十分程度で通り抜けてしまいう山間の小さな宿場町赤沢は、江戸の中頃から昭和の初期までは身延山から七面山へ向かう信者の宿としてにぎわったところである。昭和に入ってから早川沿いのバス路線の開通により、この宿を通らず七面山へ参拝が出来るようになり、行きかう人々も少なくなった。いつしか時の流れから置き去りにされてしまったかのようであったが、この宿が持つ風情や景観を守りたいという地元の人たちの熱意が実り、平成五年、国の重要伝統的建造物群保存地区に選定された。

七面山への表参道入口は、この宿から白糸の滝と羽衣橋を経て二十分程のところにある。

